

統

人團
法財

統

團發行

次 目

阿含の人身觀(下之二).....	本
日蓮宗概觀(其七).....	故梶
開目鈔講話(第七講).....	小
菅公代辯感.....	す
記	が
○本部圖報.....	林
○地方教信.....	木
寄附金維持及圖費誌料領收	多
大藏經要義續篇(共三).....	は
和歌數首.....	一一顯
大藏經要義續篇(共三).....	日
本多日生	ら郎
本多日生	正生

財團統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追随ヲ許サマル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事是レナリ教旨ノ正明 研學ノ闊達 活動ノ旺盛此等ハ統一團ノ標語ナリ

- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ醸出セラル、方ヲ正團員トス
- ◎入團員 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購読スル方ヲ誌友トス

阿含の人身觀（下之一）

故大僧正 本 多 日 生

これは比丘尼と言つて尼さんに就て擧げたのであるが、その次には俗人の婦人の例が擧げられて居る、

智慧第一なるは久壽多羅女是れなり。

智慧の非常に勝れた女がある、

智慧了々なるは毘浮女是れなり。

何事に就ても能く了解して居る女がある、

說法に堪能なるは鷲竭闍女是れなり。

本國署則

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守ン進シ

ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ

將來ニ向ソテ重大ナル任務ヲ敢行セン

ト欲ン 其中心ノ事業ヲ學グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第

二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮

スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起

スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シ

テ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日

蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一

ノ學風ト教化トヲ守持スル事是レナリ

教旨ノ正明 研學ノ闊達 活動ノ旺盛

此等ハ統一團ノ標語ナリ

◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス

◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス

◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ醸出セラル、方ヲ正團員トス

◎入團員 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス

◎誌友 統一誌ヲ購読スル方ヲ誌友トス

話の非常に上手な女があつた、

善く經義を演ぶるは跋陀婆羅須焰摩女是れなり。

お經の義理に就て非常に能く研究してこれを上手に話すところの女があつた、一

外道を降伏するは婆修陀女是れなり。

婆羅門と問答をして立派にこれを降参させたやうな女もあつた、一

音響清徹なるは無優女是れなり。

音樂の方から人心を教化した女があつた、

種々の論を能くするは婆羅陀女是れなり。

いろいろの學說議論に達して居る女があつた。これは若い女に就て言つたのであるが、その他人の妻となつて居る婦人に於てもそれよりいろいろの事柄をやつて居る。

善く如來を供養するは摩利夫人是れなり、正法を承事するは須頬婆夫人是れなり、聖

衆を供養するは捨彌夫人是れなり、當來過去の賢士を瞻視(看病)するは月光夫人是れなり、檀越第一なるは雷電夫人是れなり。

斯の如くに殆ど述べ切れないやうな澤山の仕事をして居る、これ皆な當時の女性である。釋迦は女性に左様な能力有りとし、又さういふやうな宗教の事業社會事業をしてこの人生社會を向上せしめる能化者として、立派に人生を濟度し、啓發するところの者として婦人を觀て居るのである。たゞ所化者としてのみ觀て居るのではない、邪魔者として觀て居るのではない、斯様な立派の聖行に基へる者として女性を觀て居つたのである。これ等の女性達が爲されたところの德行を考へて見ると、今日本の佛教が大乘佛教だナンと言つて自ら誇つて居るけれども、我國の大乘佛教の感化、現在日本の女性に對する感化に於て、果して斯様な阿含に於て得たやうな結果が現れて居るかどうかと考へたならば、偉さうに大乘佛教と言つて居る日本人の人達は大に恥づべきことではなからうかと思ふのであります。

尚ほ女性觀に就ては、そんなことを言つたところが女の佛に成ることは許されではないかと言ふ人があるが、それも間違つて居る。勿論完全に女人成佛を說いたのは法華經である。權大乘諸經には女性觀に就ていろいろ考のグラムした所もあつたけれども、阿含だの法華といふものは女性觀に就てまご附いたことは一つも無い。女人成佛に關しては即ち五障といふことを否認したのである、五障といふのは

梵天と成ることを得ず、帝釋と成ることを得ず、魔王と成ることを得ず、轉輪聖王と成ることを得ず、佛に成ることを得ずといふ五つの障りを女人に就て擧げて居るのであるが、それを否認して居る。その中一番大事なのは佛に成るといふことである、佛法では佛に成れば宜いので、佛に成れるくらゐの者は轉輪聖王にも成れれば惡魔の王様にでも何にでも成れる。そこで佛に成るといふ問題に就て必ず成れると説いて居るのである、それは増一阿含經の卷三十八に、寶藏佛といふ佛と寶女といふ女との問答が非常に面白く説かれて居る。寶藏佛が『女の問題はちよつと面倒な事があつて』……と言葉を濁した、ところがそこに寶女といふ女が參詣をして居つて、『女のことに就て問題になることがあるといふのは、女は成佛が出来ないといふことがあるのですか』といふので非常な鋭利な質問を試みた、『面倒な途中の話は聽きたくありません、ごま化しは聽きたくありません、簡単明瞭に、女は無上道を成就して佛に成ることが出来るか出来ませぬか、イエスかノーカといふことを聽きませう』と言つて迫つて居る、非常に面白い。

女曰さく、我れ定んで無上道を成することを得る能はざるか。

と言つて居る、實に痛快である、その質問に對する佛の答辭も亦實に簡單明瞭で、これが阿含の偉い所だと思ふ、權大乘佛教が女性觀に就てまさ／＼して居るのは愚なことである。

寶藏佛報じて曰はく、能ふなり。

「能」と一字お經には書いてある、英語のノーとは違つて可能といふ方である、寶藏佛が言はれるには『出来る』たつた一言に答へた、『女は成佛が出来る』、『それでは宜しい、モウ議論はしませぬ、サヨウナラ』と言つて居る、これが實に佛教の思想である。儒教やいろ／＼日本民族の思想などを通すから、女性に就て女は穢れて居るとかいろ／＼の事を言ふのである。併しさういふことはつまらないことで、女が穢れて居ると言へば男も澤山穢れて居る、これは愚な迷信である、女性に關する一種の野蠻女と申して、男女といふ言葉は要らないと言ふのである、世間に在るが故に女といふ言葉を佛は使はれの迷信と言つて宜しい。男女の人格といふものは元來平等なものである、大乘の佛教に於ては無男無女の申して、男女といふ言葉は要らないといふことを始終言はれて居る。でるけれども、教を立てる時分には決して男女といふ言葉は要らないといふことは無い、菩薩にあるから大乘の教には男無く女無しと言つて、佛と成れば女の佛とか男の佛といふことは無い、菩薩にも最早や女の菩薩、男の菩薩といふやうな區別は無い、お釋迦様は先づ男の方から来て居るけれども、八歳の龍女が成佛したからそれは女の佛様かといふとさうではない、皆な一つの覺りに達してしまふのである。であるから最も面白いのは離垢施女經と題するお經がある、これもやはり一般に女かけがれて居ると言ふから、佛教ではその反對を言ふので垢れないといふのである。法華經の提婆品に於ても龍女

は離垢證如來といふ名前の佛に成るのである、妙莊嚴王品に於てもその夫人は淨德夫人といふ名前になつて居る。今茲にお話するのも離垢施女といふのであつて、孰れも女を侮辱した言葉を排斥して居る事がわかる、けがれて居るとかそんなつまらぬ事を打消すことに名前からして成つて居る。離垢とは所謂無垢で、一點もけがれの無い、前に申した白き毛氈といふが如く、實にけがれの無い美しいものである。婦人はその如きものである、それを淨德とか無垢と申すのである、白無垢などといふ言葉も佛教の言葉から出て居る、即ち新しい出来立ての羽二重の白無垢のやうに、一點のけがれの無いものを以て女性であると釋迦は言ふのである。その事は婦人はどうしても心得て居らなければならぬ、男が女を侮蔑するやうな事があつたならば、『それはあなたは佛の教を聽かないからです、大體羽二重の出来立てを三越から持つて來たばかりのやうなものが女です、これはお釋迦様が言つたので私の勝手な言ひ草ではありません』斯ういふやうに日本婦人は自分の人身觀上に於て深く自覺する所がなければいかぬ。それが女性の爲でもあり、又家庭社會の爲に非常な幸福を齎して來るものである。

そこでその離垢施女經に説かれて居る話といふのは、離垢施女が舍利弗と話をして居る、所がその離垢施女が非常に高遠な話をするものであるから、智慧第一と言はれる舍利弗が驚嘆して、『あなたは佛法の小乗を學んだのですか、大乗を學んだのですか』といふことを尋ねた。その時に離垢施女は小乗とか大乗とかいふやうなことは男の佛法の中に起つた論争であつて無駄な事だと思ふ、吾々女性は佛法の

中に大だの小だのといふそんな餘計なことは餘り重きを置きませぬ、たゞ佛様の慈悲に徹底的に感孚し感激するや否やといふ宗教の本質に就てのみ吾々は考へて居る。妻の研究した佛法は大乗でも小乗でもない、慈悲柔である、議論の佛法ではない、生命の活躍して居る佛法であるといふことを言ひ表したので、舍利弗はギャファンと參つた。そこで『あなたはそんなに偉い事を知つて居る、私がやり込められる程あなたは偉いが、そんなに偉くて何故あなたが女であるのか』といふ質問を發した。すると離垢施女が『女であるから偉いのです』と答へて居る、そこが面白い、そこで舍利弗は『それはどうも聞えない話だ』『聞えないと言へばモウ一遍妻の顔を見直しなさい』と言つた。そこは非常に神祕的になつて居るが面白く説かれて居るので、今までには女の相であつたから舍利弗が『大姉よ』といふ言葉を使つて居る、即ちお姉さんと舍利弗が言ひ居つた、ところが今度見直せと言はれた時分には離垢施女が女の顔でなくして、男のやうな男でもないやうな、觀音様見たいな顔になつた、そこで『お姉さん』と言はうと思つとも言はれない、舍利弗がまごゝして姉さんと言はうか仁と言はうかとまで附いて居つたすると離垢施女が、大乗の教にはもとこれ男無く女無し、左様な男女に依つて教を二三にするが如きは餘計な話だ、そこで又舍利弗はギャファンと參つてしまつた。そこに本當は佛法の價值が有る、それを宜い加減の坊さんが、女はをなごうと言ふから業が深いと言つたり、まるで一口噛見たやうなことを今まで言ふて

居つた。釋迦牟尼の教は早く三千年の昔に男女の人格の平等を説かれた。その代りに女性の缺點は缺點として注意する所はあるけれども、本當の宗教の根本の問題に於てさういふ侮辱を與へるといふやうな事ほど悪いことは無い、注意する事は女にも有る代りに男にも有るのである。それが女の方に餘計有るといふことは決して無い、有るやうに誤解をして『さう言ふても女はあかん』と考へたがるけれども、それは事柄に依るのである。男子の長ずる所有り、女子の長ずる所が有つて、決して一概に男子が偉いといふことは言へない、家庭に於て子供を養育して行くといふやうなことは、これはどうしても女の手に俟たなければならぬのである。男子の長ずる所有り、女子の長ずる所が有つて、決して一概に男子が偉いやうなことは男がどうしてもやれないことである。先づ子供を産むといふことが男には出来ない、如何に、あがいても藻搔いても男は一人の子供をも産むことは出来ない、産まなければ人間といふものは絶えてしまふのであるから、先づ女性が子供を産み、さうしてそれを成育して行くといふことに於て、人類全體の上に非常な重大な任務を帯びて居る譯である。それに相對する仕事を男の方から取つてしまつたならば、餘は男が秀でて居るといふ點は幾らも有りはしない。家の後繼者を造ることが出来なければ、主人が幾ら金を儲けて來ても仕方がない、女が子供を産みこれを育てて行くから男が働いて金を設ける希望がある、これを除いてしまつたらどうだといふことを嚴密に研究して見たならば、女性の力といふものはなか／＼大きなものである。又その他女性が長じて居るところの事柄總てを綜合して考へたなら

ば、男の偉い所もあるが女の偉い所もある、その天分を別にして、各々分擔したる所に各々の長所があるといふことが私は當然だらうと思ふ。男を侮辱するといふこともいかぬが、女を侮辱するといふこともいかぬ、各々その尊き所に敬意を拂ひ合つて行くのが、男女相對して社會を造つて行く所以だらうと思ふのである。別段殊更に褒め上げる必要もないけれども、今まで女を侮辱したといふことは男が悪かつたに違ひない。

どうしても女性でなければいけないことは、宗教上の事、病人の看護のやうなこと、その他社會事業のやうな事等今後益々女性に俟たなければならぬ事が澤山あるのである。家庭の教育といふやうなことは、どうしても男は外に出て働くものであるから、女性に依つて子供の人格を養ふとか、或は家庭の風習を作るといふやうなことも大事なことである。又男は權勢名利の爲に兎角競争して競争をするものであるから、これを緩和する所に女性の働きといふものがなければならぬと思ふ。左もなければ反撥争鬭の結果は遂に火を發するやうなことに至る、女性あるが爲に家庭が和ぎ社會が和ぐ。この和ぐといふことが人間は非常に大事なことである、その爲に人生にゆとりを生ずるのである。これが男同士が寄り合つて權勢名利を争ひ、憎み鬭ひ、遂に喧嘩合ふやうになつたならば、人生は洵に殺風景なもので、少しも幸福ナンといふものは無くなつてしまふ。故に女性はかかるべからざる者として、宗教とか風俗人情の上にこれを考へなければならぬと思ふ。

お釋迦様はそのくらゐの事は知つて居られる、だから男が来て「どうもうちの家内も困ります」と言つていろ／＼缺點を列べ立てる、さうしてお釋迦様は女性を研究して女性の缺點を指摘することに於て名人だといふことを聞いて居るものだから、「ちつと女房の癖を漁したいと思ひますから女の缺點を教えて下さい」と言つてやつて来る、お釋迦様の所に女の悪口を聽きに来て居る。するとお釋迦様は「女の缺點も知らぬことはない、けれども男の缺點も能く知つて居る、お前は男だから男の方から先づ始めよう」と言つてその日はモウあらん限り男の缺點を列べ立てられた。「まだでせうか」「まだト／＼有る」『モウ澤山です』「澤山といふ譯にはいかぬ、まだこれはホンの序論だ」といふやうな譯でウンザリやられて、「まだ大分残つて居るからモウ一遍聽きに來い、やつと三分の一ぐらゐしか今日は話が出来なかつた……」これは辺もたまらぬといふので逃げてしまつて、到頭二度と來なかつたといふやうなことがあ經にある、これなども非常に面白いことである。そこに釋迦の偉大な理想抱負がある、男が女の悪口をあ寺で聽いて歸つてうちで女房に言ふとか、女があ寺で男の悪口を覺えて歸つて亭主の頭を抑へつけるとか、さういふことはお釋迦様は最も好ましからざる事としてお考へになつたのである。そこに釋尊の遠大な理想が現れて居る。今まででは識見の低い坊主が多かつたから、それはたゞその時に一人の亭主が小言を言はれたといふくらゐに簡単に見て居つたけれども、その奥に深遠なる釋迦の教化の妙といふものを看破し得なかつたものではなからうかと思ふ。（次續）

日蓮宗概觀

(其七)

故 梶 木 顯 正

第五章 門下の分派と談林

(一) 八派九教團

門下部内に於て今日の如く分派を生ずるに至つた理由は、予の見る處では大體三ツだと想はれる。其の一は「弟子師匠の關係から自然的に一つの系統を作るに至つた事」が一つ。第二には「宗義に對する解釋上の意見の相違」、第三は「門流系統上から自然に生ずる人間的感情のモツレ」以上三點が今日分派の大體基を爲して居ると考へられる。其處で近來

盛んに此の統合運動が呼ばれて居るのであるが（大正年頃七教團統合問題が先輩の力によつて成立したが間もなく崩れて了つた。）この問題は何時の時代でも然りであらうが、上からは一つの強烈なる力を以つて望み、下からは和協の精神を以つて應ずると云ふ事でなくては成立しないのではなからうか。上からの力とは、即ち政府をして同一精神（信仰）に立つ宗門であるならば、少々位いの形式上の相異や解行の違ひは、全く其の宗門内の學見發展途上には必ず有る事であるから、斷じて一派などとして認めずとする事である。それから下の和協の精神とは、宗内に於て行學研究上意見の相異を生じた場

合には、其れは解行發展上喜ばしい事であるから、更にそれを研究調査する機關を置いて大いに開論懇議せしむる事とし、法の爲の故に、と云ふ公明正大なる精神から堂々と論證せしめて、互ひにそれを以つて派を分つと云ふが如き、小さく立て籠る様なる精神を排除せしむべきである。一體今日の如く派の區別が表面にハツキリすると共に經濟的に各獨立の姿を執るに至つたのは、彼の明治七年一致派と勝劣派と云ふ二つに門下を表面上區別する事となり、随つて管長も亦各別に立てる事と成つた。處が明治九年身延の新居日蔵師が政府に請願して「一致派」の名稱を廢し「日蓮宗」と公稱する事に許可を得た。これが爲に舊來一致派と稱してゐた中から更に獨立を請願する者が出て、更にこの風が勝劣派にも及んで續々と獨立公稱するに至つたのである。故に吾人を以つて言はしむるならば一番最初こんな事をヤツタ者が第一悪いのである。之れが爲に官は何

の位い面倒であるか知れない。（誠くで宗規が爲に各宗が違ひ、從つて位階が違ひ又管長も置かねばならぬと云ふ事になつたから）耳ならず各宗派自身に取つても亦不經濟極まるので、それは宗門經濟を獨立せねばならぬ、學校を獨立して建てねばならぬ、布教方針を各自宗門々々で協議せねばならぬ、管長も別々に指かねばならぬと云ふやふな事になつた。（中には爲に學校さえ獨立では建てられない宗門さえ出来る事うな者まで、出來て居るのである。）今日の宗門と雖も經濟學の原理に則つて、最少の努力に依つて最大の効果を上げる制度組織に置く事を反対する者はあるまい。宗教生活は永久に傳へてゆかねばならぬ事柄である、宗教は鹽でありニカワである、之れを廢らせてはならない。

と同時に又之れを永久に與へてゆき得るやう、百年の大計の上に描く方法組織を考へる必要はなからふか。

1、**日蓮宗**、（一致派又は身延派本は單稱日蓮宗とも云ふ正應元年の創立）
教義上に於ては法華經本達一致を論ず、明治九年

公稱獨立す。派祖は六老僧中の本達一致を主張した人達（眞實は日向上人）なれども、今は其れを日蓮聖人の上に名けて居る。依經は法華經開結十卷、本山は總本山を身延久遠寺とし、池上本門寺・京都妙顯寺・同本國寺・中山法華經寺を四大本山とし、外に三十九ヶ寺を擧げて單に本山と稱す。末寺三千七百餘と云ふ。

2、**日蓮宗不受不施派**（舊一致派の分派）

この派は文祿四年（寶曆二年）日奥上人が京都妙覺寺に在て始めて唱へ、寛永七年池上本門寺・日樹再び此の義を主張す。（元祿六年平賀日述等恩田派と稱す。）（奥とす）本山は備前の金川町妙覺寺、末寺なく但し教團十餘ヶ所あるのみ。

3、**日蓮宗不受不施講門派**（舊一致派より出づ）

派祖は下總野呂談林化主安國院日講、（上人は寛文六年（寶曆後三百九十三年）不受不施を受けて、明治十五年、釋日心

官に請んで獨立公稱す。教會組織にして別に寺院は本山金川町本覺寺の他に建立せず、備前に龍華教院（鷲峰教院）と云ふがある。（不受不施派も講門派も共に信せさすと云ふことなし以て一つ）今八派と云ふ時は、不受不施派と講門派（大同小異あり）とを一つのものと見て云ふのであるが、然し教團としては「講門流」と云ふのが事實上一つ有る譯けであるから、之を數えて九教團と呼ぶのである。（この不受不施主義は天保九

4、**顯本法華宗**（舊は妙滿寺派又は什門派）勝劣派の内

派祖は日什上人、（上人は永徳三年天台宗より改宗す、當たが皆争ひた事としていた爲に何れにも付かず、直ちに日蓮聖人の遺文と法華經とに依る）法華經開結十卷を依經とするが特に、觀心本尊抄に「一品二半より外は未得道教なり云々」との大聖人の指南に従つて法華經の魂魄たる第十六如來壽量品、及び第十五涌出品の後半と、第十七分別功德品の前半分とを主義の根據に置いて布教傳道した所から一品二半宗（又は什門流）と云ふ。總本山は京都寺町二條妙満寺にして、末

寺は五百八十餘ヶ寺外に教會所數ヶ所あり、明治三十年勝劣派中より獨立公稱す。創立は嘉慶二年。

5、本門法華宗

(舊は八品派と云ふ) 勝劣派の内

此の派は日隆上人(日朗門系)を派祖とす、觀心本尊抄の「但し八品に限る」との大聖人のお言葉を唯一の根據として、法華經十卷を依經とするが特に、法華經中第十五品より第廿二品迄の八品に宗義の根據を置いて一門を建つ。本山は京都本能寺・妙蓮寺。尼崎本興寺・岡ノ宮光長寺・上總鷲山寺の五ヶ寺とし未寺三百卅餘ヶ寺あり。創立は永仁年間なり、明治卅一年公稱す。佛立譜はこの宗に屬す。

6、日蓮正宗

(正應三年の創立) 勝劣派の内

派祖は日興上人にして富士派とも云ふ、本山は靜岡縣富士郡上野村大石寺で、地頭の南條七郎次郎時光の外護に依つて建立された道場である。明治卅一年獨立公稱す。

7、本門宗

(與門派より分派す) 勝劣の内

派祖は正宗と同く日興上人なり、永仁六年強信石川孫三郎源能忠の外護に依て建つ。明治三十三年興門派より獨立公稱す、本山は富士郡北山村重須の本門寺なり。末寺二百廿五ヶ寺なりと、

6、7の二派は共に所依の經典は同じ、特に壽量口印を正依とし、本尊は十界の曼荼羅を(法寶)日蓮聖人(佛寶)とし門祖日興上人を(寶寶)と稱して末法應時の三寶と云ひ、他に佛菩薩を一切安置せず。特に正宗の方では楠の木の板曼荼羅を尊重す。

8、法華宗

(舊は日陣門流又は本成寺派) 勝劣派の内

派祖は日印上人(弟子の通称)とす。明治卅一年獨立公稱す。正依の經典は特に法華本門十四品とす。本山は越後本成寺(云ふを改稱す)末寺百八十餘

9、本妙法華宗

(舊は本隆寺派又は眞門流と云ふ) 勝劣派の内

派祖は日眞上人(頃の人)長享二年本門十四品に依つて宗を建つ。元本成寺派なりしも明治九年別立せり。本山は京都本隆寺にして末寺九十餘ヶ寺なり。以上何

派祖は日印上人(弟子の通称)とす。明治卅一年獨立公稱す。正依の經典は特に法華本門十四品とす。本山は越後本成寺(云ふを改稱す)末寺百八十餘

山は京都本隆寺にして末寺九十餘ヶ寺なり。以上何

れも所依の經典は法華經十卷を用ゆ。

(二) 一致及勝劣派の談林

一致派

(十二談林)

1、飯高談林

下總飯高法輪寺

創立者

教藏院日生

2、小西談林

上總山邊正法寺

創立者

通王院日裕

3、西谷談林

身延山西谷

創立者

通王院日裕

4、鷹ヶ峯談林

山城常照寺

創立者

寂照院日乾

5、山科談林

護國寺

創立者

本浦寺

6、松ヶ崎談林

法性院日勇

創立者

教藏院日生

7、鶴冠井談林

カイデ真經寺

創立者

本浦寺

勝劣派

(七談林)

1、宮谷談林

上總山邊本國寺

創立者

佛眼院日純

2、三ツ澤談林

神奈川豊頭寺

創立者

佛眼院日純

3、大沼田談林

上總山邊妙經寺

一五

4、細草談林——上總山邊遠霧寺——
創立者寂照院日乾
5、大龜谷談林——山城大龜谷隆閑寺——
智泉院日達

6、小栗栖談林——小栗栖本經寺
7、尼ヶ崎談林——攝州尼ヶ崎本興寺

以上の談林では勝劣派にしても一致派にしても何れも皆徳川時代には天台學を重に講じて、哲學的な面倒な學問で僧侶を養成して來たのである。(墓碑は人の教學を學ぶ事を禁じて居たと云ふ)
一佛主義が出て來る、法國冥合論が出て立正安國を叫び出す、と幕府としては頗る都合が悪いからである。斯ふした徳川三百年の幕府に依つて骨抜きにされて居た日蓮法華宗も、王政復古となつて明治と時代が變るや信徒では田中智學居士、僧侶では本多日生上人と云ふやうな人々が出て盛んに日蓮主義を世に傳へた。日蓮聖人の教學を學ぶと直ぐ一王

抑も人の世に在る誰か後世を思はざらん、佛の出世は専ら衆生を救はんが爲なり。爰に日蓮比丘と成りしより旁々法門を開き已に諸佛の本意を覺り、早く出離の大要を得たり。其の要とは妙法蓮華經是れなり。一乘の崇重三國の梁昌儀眼前に流る、誰か疑網を貼さん哉、而るに専ら正路に背いて偏へに邪途を行す、然る間聖人國を捨て、善神願を成し、七難並び起つて四海闊かならず。

——日蓮——

開目鈔講話(第七講)

小林一郎

華嚴宗は澄觀が時、華嚴經の心如工畫師の文に、天台の一念三千の法門を偷入れたり。人これをしらず。

前回には、支那に佛教が傳つて、真言或は華嚴といふものが繁昌したけれども、それは要するに天台大師の一念三千の思想を自分の教義の中に取込んだものであつて、教義としては法華經中心の天台の教義以上に出ることは出來ないといふ所を讀んで居りました。それに續いて、例へば華嚴宗では澄觀と

いふ人が最も有力な人であつて、唐の時代に華嚴宗を弘めたのであります。此の人人が華嚴經の中の言葉に天台の説を應用して巧みな説明を加へた。その華嚴經の言葉といふのは

「心は工なる畫師の如く、種々の五陰を送る一切の世界の中に、法として造らざるところ無し」といふのであつて、チョウド巧みなる畫師が、どんな物の形でも思ふ通りに描き出すと同じやうに、人間の心のはたらきは實に微妙なものである。其の心一つの働きから種々の五陰を送り出して来る「五陰」

に弘めた。今や日蓮主義の眞價は大聖人の人格と共に愈々發揮されて誠者の間に、「皇國の宗教は日蓮主義なり」と、認められて來るに至つたのである。次に日蓮宗の宗義の大略を述べる事とする。

といふのは人間の身と心の一切のはたらきを謂ふので、「種々の五陰」といへば、すべての行ひ、すべての作用といふやうな意味であります。そのすべての行ひや作用はみな心一つから出て来る。さういふ心といふものを持つた人間が相集つて、こゝに世間といふものを成して居るのである。であるから世間の一切の事柄の中に於て、如何なるはたらきでも人間の心が本にならないものは無い。つまり人間の心を善くすれば、一切の行ひが善くなり、随つて世の中が善くなる。人間の心が煩惱に満ちて居れば、自ら一切の行ひが間違つて来るから、世の中も亂れて来るものだ、といふことを華嚴經の中に説いてあるのであります。この言葉を解釋する時に、澄觀は天台大師の説かれた一念三千といふ説明を應用したのであります。

勿論この華嚴經にある事は正しいことでありますけれども、しかし天台大師が説明したほど、そんな

に微細に亘つて説いたものではない。それを天台の一念三千の説に依つて巧みに説明したものでありますから、澄觀が出て後には、華嚴經の本来の説よりもモソト詳しいものになつた譯であります。然るに世の中の人はこれを知らないで、華嚴經そのものが本來非常に勝れて居る、斯う思つて居るのである。

日本我朝には華嚴等の六宗、天台、真言已前にわたりけり。華嚴・三論・法相・淨論水火なりけり。

日本では欽明天皇の十三年に百濟の聖明王といふ王様から、公にお釋迦様の像とお經と幡、天蓋といふやうなものを渡したといふことになつて居りますて、これが日本の佛教の初めだといふ風に言つてあります。事実はさうではなくて、これは公に佛教が傳つた初めである。實際は朝鮮と日本と始終往つたり來たりして居ります間に、知らず

うち宗教はそこから行くのであつて、仕方がないこととでせう。

ところが聖德太子が御出現になつて後は、モウしつかり佛教の根本的の信仰を御獎勵になつたのであります。日本に大分入つて居つたのであります。併しながらどの宗教でも初めから眞實の所を捉まへるといふことは難かしいのであつて、一番初めはやはり福音を祈るといふやうな形から始まるのです。これは已むを得ない。だから佛教でも日本に渡つた初めに、百濟の王様から佛像を寄越すに就て、随分詳しい上表文が一緒に寄越されて居りますが、その上表文の今歴史に遺つて居るを見ても、別に佛教に依つてお前の方の國民の精神をしつかり建直したら宜からうといふやうなことは言つてない。ただ佛像を祈れば福がある。福が自在に得られるから信じたら宜

ところが聖德太子の時には、別にまだ何宗といふ

ことはなくて、たゞ佛教を佛教として、太子が主として弘めになつた譯であります。今では奈良の法隆寺などは法相宗になつて居りますけれども、聖德太子の當時に法隆寺が建てられた時には何宗といふことはない。大阪の四天王寺なども朝廷がお建てになりましたけれども、別に何宗といふことはない。たゞ一般に佛教といふことであつた。

ところが太子が御薨去になりましてから間もなく我国に朝鮮から法相宗が傳りまして、その後に於て三論宗とか華嚴宗とかいふものが相續いて傳つてそれで奈良朝の末までに六つの宗といふものが日本に傳つた譯であります。その六つの宗といふのは、俱舍・成實・律・三論・法相・華嚴といふやうな六つの宗が、これは天台宗や真言宗が渡る以前にモウ渡つて居つた。

その中に於て俱舍と成實と律といふのは、これは小乗の教でありまして、三論・法相・華嚴といふ三

はどうだ……そんな事は律の方は何も言つてない、

たゞ實際に吾々に適切な所を教へて居る。だから律は他のものと衝突はしないのであります。俱舍・成實はこれは只今申すやうに、小乗で獨立して居ないし、律は勢力は有つたけれども深い教理が無いから他の宗とは衝突しないといふことであります。

だから今度は教理を立て、互に對立するといふのは、三論と法相と華嚴この三つだけであります。この三つの宗は並んで何れも大乘の宗旨であります。これが對立して居りまして、この三つの宗の間には互に自分の宗の教理が一番上だといふやうなことで随分争ひなどがあつたものであります。

それを今こゝに言つて居るのです。こゝに俱舍・成實・律は擧げませぬで、たゞ「華嚴・三論・法相・譯論水火なりけり」と斯うお書きになりましたのはその意味であります。華嚴宗といふものと三論宗といふものと法相宗といふものとは大に意見が合は

つは大乗である。小乗の方の俱舍・成實、この二つの宗は、獨立の宗旨としては日本に弘まらなかつた大概是法相宗の人が兼學した。法相宗といふのはなかなかいろいろな事を研究するやうな氣分の宗派であります。法相宗の人が一緒に習つたのです。ですから俱舍宗・成實宗のお寺といふものは決して無い。それから律といふのは、唐の鑑真といふ人が参らまして、奈良の東大寺に戒壇を建て、所謂授戒といふことを始めたのであります。これは別に教理といふやうなものは無いのです。今でもいろいろな律を読んで見ますと、別に難かしい理論は無い。たゞ人間といふものは迷ひの多いものだから、自ら反省して、自分の行ひを慎めといふ實際的の教であります。だからどの宗とも衝突笑することはない、例へば盜むなれ、殺すなれ、嘘をつくなけれなどといふやうな、極く實際的事を戒しめるのでありますから、佛をどう解釋するか、佛と凡夫の關係であります。斯ういふのでは、それはお釋迦様が皆を獎勵する爲に仰しやつたので、眞實ではないといふことを言ふのであります。本當は聲聞で終る者もあれば、緣覺で終る者もあれば、菩薩まで行ける者もあれば、どつちにも行ける者もあり、テンでそんな教に縁の無い者もあるといふので、五つに分けて、それを皆生れながらにしてそれ／＼有つて居るから、幾ら何と言つても仕様がない。斯ういふのです。それなら法華經などで人々皆佛に成れるといふことを仰しやつたのは何だと言へば、その方が方便だと言ふ。それは生れつきに依つて教はれない者もあるナンと言つたら、皆がツカリしてしまつて信心しないだらうから

れをはんぬ。

兎にも角にも人間は皆佛に成るといふことを言つて皆を獎勵したのだ。斯ういふのが法相宗の立場なのです。

ですからこれと他の三論でも華嚴でも、皆これは人間の修行次第に依つて佛に成るといふのですからさういふ宗が一緒に混つて居れば、その間の争ひといふものは絶間がない譯です。どうもこの三つの宗といふものは折れ合はない。法相宗といふものはさういふ事を言ひながら、随分朝廷の御保護などを受けまして、盛になつて參つたものでありますから、どうも平安朝時代に於ていろ／＼な宗旨が一致致しませぬ、その事を申して居ります『華嚴・三論・法相・諦論水火なりけり』といふのはそれであります。

傳教大師此國にいて、六宗の邪見をやぶるのみならず、眞言宗が天台の法華經の理を盜取て、自宗の極とする事あらは

善無畏といふ人は元來印度の人でありまして、支那に渡る前後からいろ／＼心懸けて、支那の言葉は或る程度に使へたでありますけれども、漢文を書く力は有つて居ない。それで善無畏が説いたものを大勢集つて筆記して、それが出来上つたものが大日經疏であります。これは前にも申したやうに大體お經を漢譯するといつても、その印度の人が漢文を書いたものが出来ますから、これを比べ合せていろいろ討議した上に、一番適當なものを捨へ上げるといふのが、漢譯の通じた遣り方です。それでこの善無畏の作つたといふ大日經疏もその通り、善無畏は自分で口で言つただけであつて、それを書いた人も大部分で口で言つただけであつて、それを見た人も大勢あつたでせうが、その中に最も力を入れた主な人が一行といふ人であつた。この人はもと／＼天台宗の坊さんでありますて、天台の書物を實に能く究め

た人である。この人が信仰が變つて、眞言宗の信仰になつて、善無畏の言ふ事を聞いて書いたのです。ところが一行は自分が天台の教義を能く知つて居るものだから、善無畏の言ふ事を漢文に書く場合に、天台の説を出来るだけ應用して、スツカリ立派なもので、成程さういふ風に書いて呉れたら宜からう」といふことになるのですから、つまりこの大日經疏といふものは有體に批評すれば、善無畏と一行との合作ナンです。善無畏の言ふ事をソフクリ一行が書いたのではない。一行が天台の説に精しいからである。片方は説き、片方は書くといふ譯で、兩方が相談し合つて仕上げたものが大日經疏といふものです。私も極くざつと讀んで見ましたけれども、如何にも日蓮上人が批評して居らつしやる通り、天

それから傳教大師がこの國に上出になりまして『六宗の邪見』六宗の考が間違つて居るといふことを書いたのは善無畏であります。この善無畏といふ人は印度の人で、支那に渡つて眞言宗を弘めることに力を盡しまして、眞言宗の經典に於て一番大事なものは大日經でありますから、その大日經の註釋を善無畏が書きました。大日經疏と言つて、これは今日にも傳つて居ますが、大日經を解釋する上に於ては一番力になるものであります。その大日經疏といふものは善無畏が作ったといふのですけれども、

台の思想といふものは實に能く現れて居ります。それをこゝに有體に言つて居られるのです。どうも真言の方も、大日經を註釋するのに文字通り解釋したのでなくて、天台の法華經を中心として説いたところの説、法華經を本にしたその思想を自分の方の宗旨に取入れたのだ。斯ういふ事が佛教大師のいろいろ御議論をなさるのでスッカリ現れてしまつたこれはマア非常な功績であります。天台大師當時に於てはまだ真言宗が支那に傳はりませぬでしたから天台が法華が一番善いと言はれたところで、後から來て、天台は斯ういふ真言の經典などを見ないから法華が一番善いと言つたんだらう。今度斯ういふものが出て来ればこの方が善いのだと言はれば仕方がない譯です。ところが今の佛教大師は支那の唐の時代に當る方ですから、唐の時代に渡つたいろいろな經典を讀んで、その上で、一行の書いた大日經疏は大體天台大師の説を應用して居るのだといふこと

が出來ればこの方が善いのだと言はれば仕方がない譯です。ところが今の佛教大師は支那の唐の時代に當る方ですから、唐の時代に渡つたいろいろな經典を讀んで、その上で、一行の書いた大日經疏は大體天台大師の説を應用して居るのだといふことが最も勝れて居るといふことを憚る所なく主張さがある。その高雄寺の集りに於て、佛教大師は法華經が最も勝れて居るといふことを憚る所なく主張された。それで奈良の六宗の者がモウこれに對して異議を申立てることは出来ないといふことになつた。それが有名な高雄寺の對論であります。

これは前に法華經のあ話を申上げる時にも一通り申したと思ひますが、涅槃經の中心にお釋迦様が末の世になつて佛教を信する者の信仰を定めるその標準をお示しになつた。その一つは法に依つて人に依らざれとあり、その一つは了義經に依つて不了義經に依らざれとあるのです。これは佛様のお慈悲の一つの現れでありませう。だん／＼世が末になつて來ると、佛教の中には流派が分れて、何派とか何宗とかいふもの

を有體に現はした譯ナンですから、これは天台の教を世に弘むる上に於て非常な功績になつた譯であります。

佛教大師宗々の人師の異執をして、専ら經文を前として責させ給しかば、六宗並に弘法大師等せめおとされて、日本國一人もなく天台宗に歸伏し、南都・東寺日本一州の山寺皆叡山の末寺となりぬ。又漢土の諸宗の元祖の天台に歸伏して、誘法の失をまぬがれたる事あらはれぬ。

この佛教大師は、いろいろな宗の人々の、それべに執着して一方に偏つて居るところの考へを捨てまして、専ら經文を主にして各宗の人間を責めた。桓武天皇の思召に依つて、京都の榜の高雄寺といふ所

が分れて互に相争ふ。世間一般の人間は何れに依つたら宜いか判らないやうになるだらうといふことを豫めお察しになりましたから、そこで末の世に至つて自分の信仰をどうしてきめたら宜いかといふにはこの標準に依れ、第一には法に依つて人に依らないやうにしろ、それから了義經に依つて不了義經に依らないやうにしろ、斯ういふ事を言つて居られるのです。

『法に依つて人に依らざれ』といふことは、佛教の宗旨がいろいろな主張をするから、その主張を比べて、その中の一番善い教に依るべきである。人に依らざれといふのは、その説き弘める人がどんなに勢力が有つても、そんな事などを考へる必要はない。又教に歸依する人が世間のどんな立派な人が歸依しても、そんな事を考へる必要もない。時に依れば正しい事が行はれないで、つまらない事が行はれるといふことが世の中にあるのだから、大勢が歸依した

けられた法に依るべきだといはれるのです。

から必ずしもそれで善いといふものではない。又地位の有り身分の有る人が必しも宗教の事に深い譯事はないから、大臣が歸依したから善い、大將が歸依したから善いといふ譯のものではない。そんな事はかまはない。たゞ教の内容に依つて一番正しい教に依つて信仰を定めたら宜い。斯ういふ事を言つて居られるのであります。これは尤であります。

併しそれなら法に依るといふその法に依る依り方はどう依るかといふと、今度は『了義經に依れ』と言ふ。佛様が自分の心持をスッカリ打明けられたその教の方に依つたら宜いのであるべく、『了義經』と言つて、佛様が本心を打明けられない方便の教に依らないやうにしろといふのです。だからこの『了義經』に依つて不了義經に依らざれ』といふのは、前の法に依れといふその『法』の説明です。その法はどんな法かと言へば、『了義經』と言つて佛が本心を打明

けられた法に依るべきだといはれるのです。こうすると法に依れと言つても、どの法が善いか、素人には解らないし、又『了義經』に依れ、佛の本心を打明けられた教に依れと言つたところが、何處で佛が本心を打明けられて居るかといふことは、なか／＼容易に見分けが附かない譯です。

そこでどうしてもこれをきめるには所謂對論を経なければならぬといふことになる。各宗の代表的な人がそこに集つて、何の遠慮も無く、各自の宗旨を逐うたのです。

その高雄寺の問答に於て、傳教大師が天台宗を日本に弘めるといふことを南都六宗の人々に承認させたことは、傳教大師が觀山を開いていろ／＼やつて居られるけれども、始終奈良の坊さんから異議が出る。今まで六宗で以て澤山だのに、又新しくそんな事をやるといふのは、どうも折角平和な宗教界を亂すものだから、あれを禁じたら宜からうといふやうなことで、頻に異論が出たものだから、そこで高雄寺での問答となつた。その結果『法華經』が一番善いのだ

の教義を語り合つて、これを話合つて見れば、結局どれも代表的な人だから、佛教の教義に明るい人同士であるから、どれが劣つてどれが勝つて居るか、どれが本當に佛の御精神に叶つて居るか、といふことは、自ら解る譯です。斯ういふので對論といふことが出来て來るのです。さうなるとその教を説く人の世間的地位とか勢力ナンといふものは何の役にも立ちはしない。又どれ程世の中で歸依者が多くても、話合つて見てつまらない事を言つて居ればそれつきりの話でありますから、斯ういふ事は洵に堂堂たる主張であります。

この對論といふことを始めたのは支那では天台大師であります。天台大師は支那の陳と隋の時代に居られたのであります。當時『南三北七』と言ひまして、支那の南方に三つの宗派があり、北の方に七つの宗派があり、都合十派あつた。その十派の代表者を集めて、天台大師

から、法華經を弘めるに異議はないか』異議はありません『斯ういふことできまつた譯であります。その前例を逐うて日蓮上人が鎌倉の各宗の寺の代表者を呼んで、北條執權の監督の下に對論をしようぢやないか、斯ういふ事を言はるのであつて、日蓮上人は何も奇を好んで自分が新しい事をしようといふお考ではない。天台、傳教の昔の例に依つて各宗の者と對論をしよう。斯ういふ事であつたのであります。この思想は、これは實に男らしい公明正大な思想であります。若し對論してその際に自分が間違ひだときまつたら、その時から直ぐ自分の主張を捨てようといふことはチャンときめて居られる。その思想を開目鈔のズット終りの方に

智者に我義やぶられずば用じとなり。

が、法華經の精神も教理も説かないで、枝葉の事で以て『今は非常時なり』といふやうな事ばかり言って弘めるけれども、それは卑怯な話です。教を弘めるには、教の内容を以て押して行かなければ、まるものではない。それは昔から法華經を弘める人は皆さういふ態度を執つて居る『何處か間違つて居るなら言つて呉れ、こつちがいけなければいつでも廢める』といふ態度で行つて居る。それだから本當に法華經を弘めるといふことに精神が有る譯で、力が入る譯であります。

それをこゝで言つて居る、種々の論を捨て、經文を前へ立て、責める。別に自分の考ではない、あ經に斯うある、經文を本にして見れば、法華經が一番勝れた經であるといふことは間違ひがないといふので、所謂法論を聞はされたのであります。

そこで奈良の六宗の徳の高い人、八人、十二人、十四人といふのは、實は對論したのは十四人の人で

破られたら直に降参する。けれども議論の上に於て自分を負かすことが出来ないで、島流しにするとか首を斬ると言つても、そんな暴力でやつたつてこつちは動きはしないぞ。斯ういふことであります。大變に勢の良いやうなことであります。一方に於ては虚心坦懐と言ひますか、私を捨てた考であります。理論上で負けるならいつでも潔く降参する。併し議論で負かすことが出来ないので、力づくでやつても自分は肯きはしない。斯ういふことであります。

法華經を弘める人はいつでもこの態度で行かなければならぬのであります。理論で行かなければいけない。教理を比べ合せて、法華經の教理が一番善いといふことを納得させて、他の者を法華經に入れて行くのでなければ、その他の枝葉のことを取入れてそれで争ふといふことは、それはモウ法華經を弘める人の態度ではない。これは今の法華經を弘める人

す。その初めに八人を選び出し、十二人を選び出すとかいろいろな手續がありまして到頭十四人になつた。その他其處に參加した人が大勢居つたものですから、その大勢の人も皆責められて、法華經が一番勝れて居るといふことはこれを承認しなければならないことになつた。

それから『弘法大師等せめあとされて』とあります。すが、これは少し事實とは違ふのです。弘法大師は傳教大師が榮えて居らつしやる間は小さくなつて引込んで居て、何も言はなかつた。傳教大師がお入滅になつて次の年に、モウ傳教が居なくなつて見ると弘法ほど學問もあり、智慧の有る人はありませぬから、そこで朝廷の御保護を得て、京都の東寺を賜つて、これを真言の道場として、それから真言宗が世に弘まつたのであります。ですから弘法大師が傳教大師に責められたといふ事實はないのであります。何故『弘法大師等』と書かれたかといふと、要する

に真言の教義でもこの法華の教義には敵はない、斯ういふ意味で弘法大師等と一緒に入れて書かれたのであります。これは歴史上の事實には違ひますけれども、精神に於てはさうなのです。真言の教義を持つて來ても天台の教には及ばないから、そこで有ゆる宗の教義といふものが天台の教には敵はないといふことになつて、日本國一人も残らず天台宗に歸伏した譯です。さうして南都でも東寺でも、日本中殘らずのいろいろな寺が皆叡山の下に屬するといふことになつたのであります。

それから又漢土の諸宗の元祖が天台に歸伏して誇法の失を免れたといふのは、これはあまり細かいことになりますから一々の事實は申上げませぬが、唐の時代に真言、或は華嚴、三論、法相を弘めた人が大抵は天台の書物を能く讀んで、さうして天台の説の正しいといふことを皆認めて居るのであります。詳しい事は申しませぬが、若しその方に興味のあ有りになつたのであります。

りになる方は、傳教大師の「依憑集」といふものを読みになれば證據が擧げてあります。これは一巻の書物であまり大部のものではありますから直ぐ読みます。この中に詳しく書いてあります。華嚴宗の人々といふものが天台の本を讀んでこれに心を傾けたといふことが一々事實を擧げてある。これは事實であります。その事實を擧げて傳教大師が依憑集の中に書いてあります。

かの邪宗にうつる、結句は天台宗の碩徳と仰がるる人々みなおちゆきて彼の邪宗をたすべく。さるほどに六宗・八宗の田畠所領みな倒され、正法失はてぬ。

ところがその後漸く世が衰へて來た。これは衰へる筈でありまして、平安朝の末から武家の時代になって、源平の争ひになり、世は戦亂の絶間がない、殆ど落着いて物を考へるといふやうなことも出来ないやうな時代であつたのですから、だんく人間は深く物を考へることが出來なくなつて來る。これは大變な勢ひであります。それだから天台の深い教などは行はれないやうになつて來た。それは叡山でやるべきであつたのです。ところが叡山の別れとして三井寺といふものが獨立して、叡山と三井寺と始終喧嘩ばかりして居つて、互に火を放け合ふといふ話は行はれないやうになつて來た。それは叡山でやうなことばかりやつて居るから専門の坊さんの方

でも勢力争ひばかりやつて居つて、本當の教義の研究といふことをやらない。だから世が衰へて、世の中も戦争の絶間がない、坊さんの方でも殆ど戦争のやうな状態で、勢力争ひばかりやつて居つたから、だんく人に人間の知識といふものが淺くなつて來て、天台の深い心持は解らなくなつてしまつた。無論これは宗教の本當の教義を明かにするのには、表面だけいゝ加減に習つて解るものではないのであります。傳教大師が仰ります。傳教大師が仰る事に、「淺きは易く深きは難しとは釋迦の所判なり、淺きを去つて深きに就くは丈夫の心なり。」と言つて居られる。浅い方は易しく、深い方を知らうと思へば難かしいのだといふことは、お釋迦様がチャンと言つて居らつしやるのだ。けれども淺きを去つて深きに就かなければいけない。それでなければ、佛様の本當のお心持は解らないから、淺きを去つて深きに就くのが本當のしつかりした人間たる者

の心懸けでなければならぬ。易しいものを求めて眞實のものが得られはしない。これはいつの時代でもさうです。品物一つ擁へても、良い品物は骨折らなければ出来るものではない。成べく骨折らないやうにして成べくうまい事をやらうと言つても、そんな事は出来るものではない。だから浅きは易く深きは難しとは釋迦の所判である。本當に深い事をやらうとすれば難かしいのだ。難かしい事を覺悟しなければ本當の信仰は得られないぞとお釋迦様は仰しやつてある。だから自分達も浅きを去つて深きに就いて如何に骨が折れても眞實の事をやらうぢやないかといふことを傳教大師が言つて居らつしやる。

又努力を吝んではいけないといふことは、お釋迦様當時から始終言つて居らつしやることで、梵網經の中には『怖勝順劣戒』といふことがあって、勝れたるを怖れ、劣れるに順ふといふことはしてはならぬと戒しめてある。苟くも佛弟子たる者はさういふ

卑怯未練な心持ではいけない。難かしい事は『これは自分の力には出来さうもない』と思つて怖れてやらない。それでつまらない智慧で以て『この邊で滿足しよう』と言つて、低い教で自から足れりとするといふことは佛弟子ではない。佛の弟子としては左様なことがあつてはならないと嚴しく戒めてあるのです。ですから苟くも佛教を學ぶ以上は、骨の折れることぐらゐは覺悟しなければならぬ。易しい事はどうせ碌なものではないのでありますから、その事は大乘の佛教を一貫した思想であります。それだから人間の智慧が淺くなつて、何でも易しいので満足するといふやうな時を標準にして、それで教を弘めるといふことであれば、教といふものはモウ力の無いくだらないものになつてしまふのであります。その後その事をこゝに言つて居るのであります。その後世裏へ人の智慧が淺くなつて、どうも深い事を考へない、骨の折れることは逆も解らないといふやうに

ことになる。だから自分の宗旨を抱き貫いて行けば宜いけれども、念佛でも禪でも眞言でも同じだと言ふなら、念佛も禪も眞言もその方が本家だから、向ふの方が上になつてしまふ。だから浅い方に就けば浅い方が上になる。何故そんな餘計な事を私が申すかといふと、この頃頻に病氣を癒すとかいふやうな、生長の家とか『ひとのみち』とかいふものが大に繁昌する。少しも不思議はない。何故なら法華だの何のと言つて居る人が、その大事な教義を捨てしまつて『御祈禱すれば病氣が癒る』とか『御祈禱すれば金が儲かる』と言ふのでせう。それならそんな法華ナンといふよりは、今の世に新しく出て來た方が新し味があるから皆が餘計入る譯です。同じ事なら昔の舊い言葉を習ふより、今の新しい言葉で言つた方が解りが良い譯でせう。それだからさういふ所謂邪教といふやうなものが流行るのは、法華をやつて居る人などが、自分で自分を邪教にして居るか

的なものは本當の佛教ではなくなる譯であります。

から六宗・七宗に負けて居るといふと、結局は六宗・七宗にも及ばないやうなものになつてしまつた「いふにかひなき禪宗・淨土宗」これは教義として天台の教義と對立することの出来ないやうな、その禪宗・淨土宗に却つて負けてしまつて、初めは極居るからであつて、少しも不思議なことはない。今こゝを讀んで見ると、やはりさういふ事を教へられて居る。法華經を弘める人が法華經を捨ててしまつて、何でも宜いと言へば淺いものの方が流行つて行くのだ。自分の方はそれに降参したのだから、本家に及ばないことになると言つて居られるのであります。どうしてもこれは佛教を本當に信じようとすれば、骨が折れようが、難かしからうが、眞實の事を信じようといふ決心を捨てゝはいけない。それがなければ佛教といふものは無くなつてしまふ。便宜にして、どうしてもこれは佛教を本當に信じようとすれば、骨が折れようが、難かしからうが、眞實の事を信じようといふ決心を捨てゝはいけない。それがなければ佛教といふものは無くなつてしまふ。斯ういふ

のと、仰がれる人も、皆信者に引かれてしまつてさういふ方に堕ちて行く。それで法華の眞實の正しい系統といふものは無くなつてしまふ。斯ういふのであります。

だんぐりさういふやうになつて行つて、禪とか念佛とかいふものが盛になつて行くから、今まであつたところの六宗八宗のお寺の有つて居る田畠とか所

領といふものは皆無くなつてしまつて、さういふお寺は立行かなくなつた。たゞ榮えて行くのは禪とか念佛とかいふやうなもので、眞實のお釋迦様の正しい系統を傳へた佛教といふものは無くなつてしまつた。

け考へれば、正しい教を説いて餓えて死ぬことはないのです。そこを考へなければいけない。それが傳教大師の遺戒にあります。

『道心の中に衣食有り、衣食の中に道心無し』

この事實は今後の佛教を維持する上に於ても非常に大事な事であつて、無論お寺といふものは檀家の歸依に依つて立ち行くものには相違ない。併ながら教を弘める人がその教に歸依する人の意を迎へるといふことになれば、教といふものは地に墜ちてしまふのは無論の話です、だから出家の人は、信者の意を迎へるといふ考を假にも有つてはならない。皆の氣に入るやうにしようとすれば、自分が降参するのだから駄目です。併ながら如何に世の中が間違つて來ても、世の中の人間が皆間違つてしまふではないから、出家の人が自分が養澤をしようといふ考無しに、たゞ生きて行けば宜いといふことだ

ならぬことです。これは佛教ばかりでなからうと實は思ふのです。自分の學校でよく學生にこの事を言つたのですが、今はマア學校を出ればなかへ就職難で仕事が無いのですけれども、本當に頼もしい人であつたら、どうかして食ふだけは食へるのです。本當に頼もしい人でないからどうも心に緩みがあつたり、頼もしくないから仕事が無いのですけれども、眞に頼もしい人であつたら、どんなに世の中が行詰つても、餓えて死ぬことはないのです。その事は確に言へるのです。確に『道心の中に衣食あり』です。但しその衣食は贅澤は出來ないでせう。ところが衣食の方を重んじて『月給が幾らになる』そんな事ばかり考へて居つたら、結局道心無しといふことになるでせう。この事はどうも動かすべからざることのやうであります。

それであるからこの事を言つて居る。檀家の御機嫌を取つて、信者が念佛だと言へば『俺も念佛だ』かり考へて居つたら、結局道心無しといふことになります。

と言ふ、信者が眞言だと言へば『眞言だ』……信者に引かれてやつて居つてお寺が繁昌するかと思ふとさうではない。結局自分の方の所領を皆他に取られてしまつて、自分達が困つて来る。これはどうも自業自得で仕様がない。本當の信仰といふものが無いからさうなつたのだ。斯ういふ事を言つて居られるのであります。これは昔の事でありますけれども、今後に於ても大に戒しめなればならぬことあります。

ことを望むならば、その國に良い教が弘まることを望まれるに相違ない、だからその國に良い教が弘まつて居なければ、神様もガツカリしてこの國を見捨てられるだらう。斯ういふ思想ナンです。これは尤なことであります。皇室が佛教に御歸依になるのも全くその通りでありまして、御先祖の神々を差置いて佛教を御信じになつたのではない。佛教を弘めることに依つて國民の心が建直る、國民の心が建直れば國が榮えて行く、國が榮えて行けば先祖の神様もお喜びになる。だから佛教を信ずるといふことは神様を捨てる事ではない。その所が能く解らないものだから、神道の人などは『何だ佛教など餘計なものを入れる。こつちには神様があるから神様で行かうぢやないか』といふやうなことを言ふのだけれども、併し人間の心がだん（複雜になつて來るとその複雜な人間の有つて居る問題を一々解決するやうな教義でなければ、幾ら良い教でも世に行はれは

如何なる神様でも、それはその國に依つて特別の神といふものがありますが、神といふものはその國の榮えることを望むものである。その國の榮える

天照大神・正八幡・山王等、諸の守護の諸天善神も法味をなめざるか、國中を去給かの故に、惡鬼便を得て國すでに破れ

なんとす。

如何なる神様でも、それはその國に依つて特別の神といふものがありますが、神といふものはその國の榮えることを望むものである。その國の榮える人に單純なものである。單純な神様の教で複雜な、今の人間の有つて居る問題を一々解決しようと言つても解決出来はしないのです。それだから世がだん（複雜になつて來ると、どうしても大乘の佛教のやうな教を以て人を教ひ、人を導かなければならぬのでは、非常に深い、如何なる問題でも解決し得るやうな教を以て人を教ひ、人を導かなければならぬのです。さうしてその教に依つて世の中を教へ導いて行くといふことが、やはり御先祖の神々のお心持に叶ふ道である。さういふ點に於て何をこじつけるのではない、こじつけてはいけない。佛教といふものの弘まることがやはり神様の御精神に自ら叶つて行くのだ、斯う考へて宜い譯です。さういふ事をこゝに言つてある。だから佛教が弘まらないといふと、この國を御守護になるところの神様も國をお去りになるものと見える。さうして惡鬼が便を得て國すでに破れなんとするのである。

るといふことを明かにすることと、この二つが大事です。それは

釋尊出世の本意

十二 乗作佛

これでチヨウト一段落致しまして、教といふものが大事だ、その折角大事な教、正しい教を蔑ろにして、いゝ加減な教を弘めるといふことでは困る。斯ういふのであります。それならばその正しい教とは何だ、それは法華經であるにしたところが、その法華經の中於て何處が重要な點かといふことを、これから段を改めて述べられるのであります。

此に予愚見をもて、前四十餘年と後八年との相違をかんがへるに、其相違多しといへども先づ世間の學者もゆるし、我身にもさもやとうちおぼふる事は、二乘作佛・久遠實成なるべし。

法華經を大體分けますと、その前半が迹門であつて後半分が本門である。前半分に於ては、お釋迦様が何故に世の中に出て教をお説きになるかといふことを明かにすることと、それから佛の教は皆一つであ

りあります。現在に於ては愚かな者もあるし悪人もあらけれども、皆佛に成る本性を具へて居るのだ、佛性を有つて居るのだから、これを教へ導いて、残らず一切の者を皆佛と同じにしてやりたいといふ、所謂方便品にあります「一大事の因縁」といふことであります。過去に於ては愚かな者もあるし悪人もあるけれども、皆佛に成る本性を具へて居るのだ、佛を佛自身と同じやうなものにしてやりたい。所

れが釋尊の世に出られる御本意である。そこで一切の人間を佛にするといふ教をいきなり説いても仕様がないから、初めは小乘の極く低い方から説いて行らつしやる。併しその低い教を説く時に、モウ本心を打明けた教を説くのだといふ決心をして説いて居らつしやる、そこを見別けなければならぬ。低い教を説く時に、低い教だけ説いて居るのではない。言葉には低い教を説いて居るけれども「どうかそれを聞いた者がこの邊からだん／＼入つて行つて、終には大乗の修行をして佛と同じ境界にまで行つて呉れるやうに」といふ、皆を佛にしようといふ心持をしつかり有つて、さうしてこの低い教を説いて居らつしやるのだ、斯う思はなければならぬ。だからそのつもりで讀んで見ると、今私共は法華經を讀んで居りますが、法華經を讀んだ心を移して見ると阿含であらうが何であらうが、極く低い所を説いて居るやうだが、そこに非常に深い意味がやはり籠つて

居るのです。深く味へば幾らでも深く味へる。どんな簡単な事を仰しやつても、佛様はそんなに簡単に仰しやつて居ない。言葉は簡単だけれども、そこを深く解釋すれば、やはり大乗の教に通する精神がそこにある。それがお釋迦様の世にお出になる眞實のお心持であります。

それから又そのお釋迦様の仰しやる事は、お釋迦様お一人のお考ではないのであつて「諸佛道を同じうする」過去の佛も、現在の佛も、未來の佛も、苟くも佛である以上は、やはり皆を佛と同じやうな智慧や慈悲を具へる者にしてやらうといふお心持を以て、教を説かれるのであつてお釋迦様のお考は有ゆる佛のお考と同じである。又十方の世界にどれだけ大勢の佛が出ても、その佛のお説きになる事は同じである。だから有ゆる佛と同じお心持であ釋迦様は世に出て教をお説きになる。その教をお説きになるのは結局皆を佛様と同じ智慧を具へるやうな

ものにしてやらうといふも考へてお説きになる。斯ういふのであります。

だからこの二つは一つになる。そこで所謂「二乗作佛」といふことになる。二乗即ち聲聞とか縁覺といふやうな小乗の教を習つた者でも、本當に佛が一生懸命にお説きになると氣が附いて、自分は小乗の教だけ修行して居るのでは相濟はない、これから進んで一つ大乗の教を學んで、所謂菩薩の行を積んで自分も一緒に骨折りませうといふ氣分になるから、その氣分になつたのが門途となつて、それからだんだん佛に成る道に入つて行く。それが所謂二乗作佛であります。

この二乗作佛といふ言葉はよく誤解があるのです。聲聞縁覺といふやうなものを、佛様が特別に御最負で、やはり佛にしてやられるのだと風に誤解してはいけない。二乗が自分で今までの間違つたことに気が附いて、さうして菩薩の行を積まうといふ決

心をすれば、その決心が動かないから、その決心を貫いて行けば、將來佛に成るぞといふ所謂記景を與へられる。斯ういふことになるので、要するにその當人の決心がしつかりして居なければ、佛様がどんなに佛にしてやらうと思召ても出来ることではないのだ。その自分の心持といふものをいゝ加減にして居つて「法華經は二乗作佛の有難い法だから、闇のある時に讀んで居つたら自分も佛に成るだらう」。そんな籠の緩んだことでは逆も佛の御精神とは一致しない譯であります。

それが所謂二乗作佛といふことで、二乗といふのは屢々申すやうに、小乗の教を學んで覺りを開いた進んで菩薩の行を積むことに依つて佛に成れるのだ斯ういふことが一つの事であります。

ところがそのお釋迦様がさういふ御趣意で教をお説きになつたといふこと、又有ゆる佛様が皆同じ御

精神だといふことは、何を本にして言ふかといふことになつて、そこで初めて本門の所謂「久遠の本佛」といふことが考へられて來るので、即ち永遠の生命を有つた唯だ一つの佛様があつて、その唯だ一つの佛様がいろいろな佛に成つて現れて來られるのだ、斯ういふのです。もと一つの佛の現れたものであるから、有ゆる佛の教が同じだといふことは不思議はないし、又有ゆる佛が同じ覺りを有つて居らつしやるといふことも不思議はない。さうして又その根本の一つの佛の力といふものが現れて、洵に小さいけれども吾々自身の有つて居るこの佛性といふものにもなつて居るのだから、その力が現れたこの佛性と、茲に現れた佛様の教とが感じ合つて、人間が一生懸命考へた時に、その教が自分の心に入つて來るといふことは不思議はない。本が一つであるその本が一つだといふことを明かにしなければ、どうして佛と佛とが同じ道を説かれるかといふことの

徹底的の解決は附かないし、又どうして吾々の佛性が佛の教と通ひ合ふかといふことの徹底的の解決は附かない譯です。だからどうしても根本は一つだ、本は一つの佛様である。その一つの佛様の力が有ゆるものに現れたのだといふことを明かにしなければ本當の土臺が解らない。それを「本門」の方で言はうといふのです。壽量品でそれを言はうといふのであります。それが所謂「久遠實成」遠い昔からモウ佛様は佛様であつて、たゞ一つの實在である。その佛の力が現れていろいろな佛様になつたのだ。斯ういふことになるのであります。

さうすると又茲に問題が出て来て、それではどの佛でも宜いぢやないか、本の一つの佛が現れていろな佛になつたのだから、どの佛でも宜いぢやないか、ナニモお釋迦様に頼らなくとも宜いぢやないかといふ議論がそこに出来て来る。それには立派に解決が附いて居る。お釋迦様は娑婆世界の佛様ぢや

ないか、吾々は娑婆世界に生れて居る、この娑婆世界に生れて居る吾々を感んで、娑婆世界に自分の身を現はして、この娑婆世界の吾々の爲にお釋迦様が教をお説き下さつたのだから、この最も縁の深い娑婆世界の教主である釋尊を頼らすして、他の佛に頼りやうがない。斯ういふことになつて来る。ナニモお釋迦様が總ての佛様の中の一一番上の佛様だ、下の佛様だ……そんなことではない。吾々に縁の有る佛様

だ、この娑婆世界に出現して、このいろ／＼な面倒の多い娑婆世界の吾々を救ふ爲に、特に本佛が人の身を現はしてお釋迦様となつて此土に出て行らつしやつたのだから、この特に縁の有る、特に吾々の爲に出現された佛様に頼つて行かうぢやないか、これより外に道は無い譯です。

ですから法華經に依つてお釋迦様を通して本佛を仰ぐといふ思想は、筋道はズツと立つて居るのです。少しもこじつけではないのです。それを明かにして

如來・具足千萬光相如來等なり。

そこで法華經の中に説かれた所を見ると、舍利弗は華光如來となる、迦葉は光明如來になるとかいふやうに、こゝにズツと澤山列べてあらりますが、要するにこれは將來佛に成るといふことをお釋迦様があくしになつた所謂授記であります。その授記をなさる時には必ず條件が附いて居る「お前は佛に成るぞ」と決して簡単に仰しやらない。汝は今より後にこれ／＼の善い事をして、それが出来たら佛に成るぞといふ条件がある。だからこの條件を満せば佛に成るといふことは、言ひ換へればこの條件を満さなければいつまでも佛に成れない譯でせう。それが所謂授記であります。だから授記といふことは責任を負はされたことです。斯ういふ事をやれ、やれば佛に成るぞといふのですから、やらざるを得ない授記は非常な責任を負はされたことです。それで法

その筋道を見透して行かない、何だか他の宗に對立してこの法華の一つの宗を立てたといふ風に思ふと、要するにどれでも宜いぢやないか、そんなに喧嘩しなくても宜いぢやないかといふことになりますが、決してさうではありません。

それだから三乘作佛といふことと久遠實成といふことと、この二つの事をしつかりと考へなければならぬ。

法華經の現文を拜見するに、舍利弗は華光如來、迦葉は光明如來、須菩提は名相如來、迦旋延は閻浮那提金光如來、目連は多摩羅跋栴檀香佛、富樓那は法明如來、阿難は山海慧自在通王佛、羅睺羅は踏七寶華如來、五百・七百は普明如來、學無學二千人は實相如來、摩訶波闍波提比丘尼・耶輸陀羅比丘尼等は一切衆生喜見

華經を讀めば佛に成ると簡単には言へない。法華經を讀めば責任を負はされる。必ずお前は菩薩の行を積んでこれ／＼の事をやれと言はれる。やれば将来佛に成れる、やらなければいつまで経つても佛になんぞ成れる譯はない、それはモウ授記には皆ある。それだから勝鬘經といふお經を讀んで見ると、勝鬘夫人といふ人がお釋迦様に授記されてから「これは大變だ」と言つて居る、どうも授記をされば大變だ、自分はそんな事は思ひも寄らなかつたのだが今的心持で行けば佛様と同じになるといふのだからこれは大變だ、これからモウ一つ奮發してやらうと言つて、勝鬘夫人は自分の覺悟を説いて居る。ではないの、責任を負はされたことですから、その責任を果さなければ佛に成れはしない。これをいふから授記されるといふことは少しも安心したことではござんす。勝鬘夫人は自分の覺悟を説いて居る。加減にしてしまつて「何でも法華經を読みさへすれば佛に成る」と言ふ。だから坐睡り半分に、時々大

聲を出して讀んで居れば佛に成れるやうに思ふのですが、そんな事はお經の中に一つも言つてありはしませぬ。本當に一心になつて善い事を積んで、さうして一步々々と佛の境界に近づいて行くのであります。さういふ事は實に法華經の中に明かに示されたことであります。

此等の人々は、法華經を拜見したてまつるには尊きやうなれども、爾前の經々を披見の時は興さむる事どもをほし。

これ等の人々は佛に成るといふのだから、尊い人のやうだけれども、爾前の經、法華經以前の經を見るに、洵につまらないやうな事が随分多い。といふのはまだ菩薩の行を勵まうといふ決心をしない前のそれ等のお弟子達は、慈悲の心持も足らないし、一切の人を佛にするといふ決心もまだ附かないから、その時代は皆まだそれ程のものではなかつた、ところ

が法華經になつて見ると、お釋迦様はこの世の中の一切の衆生を自分の子と見て、自分一人が救はうと仰しやつた。而も聲聞や緣覺といふやうな低い教で満足して居つてはいけない。佛の弟子といふものは皆大乗の教を學んで、菩薩の行を積まなければいかぬといふことを仰しやつた『聲聞の弟子無し』と言ひ切つて居られる。聲聞であつては我が弟子ではないぞといふことを明言して居られる。そこで大勢の弟子達も奮發して、これから一つ大乗の教を勵んで菩薩の行をやらうといふ決心をした。それは法華經を聞いて初めて大勢の弟子が本當の佛弟子たる決心を附けたといふのですから、その前は『興さむる事あほし』まだ／＼足らない事が随分あつた。斯う言はれて居るのであります。

さうなつて見ると、前に所謂小乘の教を聞いて修行したその修行が無駄にはならない。そこが大事です。若し小乘だけで済ませれば、今までの修行は無ければならぬ譯であります。

(第七講了)

駄になる。自分が人を救ふことは出来ないでお終ひですから……。ところが今度大乗の教を學んで、菩薩の行を勵むといふことになれば、今までに積んだのは、ちょうど梯子段の下の段を上つて來たやうなものであるから、一つも無駄にならない。それから上の修行をすれば下の事は無駄にならない。下の事だけで終つてしまへば、これは皆無駄になつて役に立たなくなる。そこでどうしても吾々は一步々々と上の所をやつて行かう。出来るだけ上の方の教を學ばう。さうすれば下の方の教を修行したのが皆活きて来る。無駄にならぬ。斯ういふ事が考へられるのであります。

それだから法華經が魂だといふことを言はれるのはそれです。ナニモ法華經だけ偉いといふのではありません。法華經が本當に解つて見れば、今まで小乗の『盜むなけれ、殺すなけれ』といふやうな事を修行したことか皆役に立つて来る。皆それが世の中を救つ

是法華經を見聞し讀誦し書持し供養すること得ること能はずんば、當に知るべし。是人は未だ善く菩薩の道を行せざるなり、若し是經典を聞くことを得ることあらば、乃ち能善く菩薩の道を行するなり。

三月十四日霧峰會館に於ける本多上人記念大講演會の際、小林先生開會の御挨拶であります。當時の都合で先月號に掲げ得なかつたことを御諒察願ひます。——満生——

所感

小林一郎

私は今晚、別にお話を申上げる積りで上つたのではありません。今日のこの會の發起人であります。この會の爲に大勢の方があ出で下さつたことにお禮を申上げようと思つて出ましたのであります。先程からお二方(本多前大使 小笠原子爵)の有益なお話がありましたので、もはや私共何にも口を容れることはございません。たゞ、私も本多上人御生前に於ていろいろお教を受けましたので、上人の御一生を振返つて見まして自分の感じて居ることを極めて簡単に申上げて見ようかと思ひます。

いろいろな點から申上げたいこともありますが、私が最も深く感じて居りますことは、本多上人の御一生がチヨウド日蓮上人の御一生をその體に現はして居るといふことであります。と申しますのは外の

ことでもない。日蓮上人の御一生を私共考へて見ますと、三つの點に於て殊に私共のお手本となつて居るやうに思はれる。第一は、十二歳の時から、三十二歳で法華經を弘める爲に奮起されるまでの二十年間の研究時代、この研究が土臺となつて日蓮上人の信仰といふものが出来て居る。この二十年の研究はこれは命懸けの研究である、私共が本を讀むのとは違ふ、命に懸けての研究であつた。その當時の日本の佛教の有様を日蓮上人が見られて、これではいかぬ、一人のお釋迦様が始まられた佛教が七つにも八つにも、十にも分れて居るといふことが第一問達つて居る。何か一つに纏めなければならぬのだが、さア何を中心としてこの佛教を統一すべきか、斯ういふ問題が起つた。それからもう一つは、當時の日本の國の有様が如何にも心細い、日本に佛教が渡つて久しく経つのにチツとも人間が善くなつて居ない世の中は滅茶々々だ、これでは折角佛教の行はれた甲斐はない、どうしたら日本の國を教ふべき佛教が得られるだらうか、この二つの問題です。何を中心として佛教を統一しようかといふことと、如何なる佛教を以て日本國を教はうかといふことを言つて居られる。日本第一の智者となりたいといふことを懸けられて、日本第一の智者となりたいといふことを言つて居られる。日本第一の智者となりたいとの智慧を誇らうといふのではない。この大問題を解決する爲にどうしても日本第一の智者になりたいといふ願を懸けられて、熱心の餘りに血を吐かれたといふ言傳がある。この二十年の、魂を打込んでの

研究、その研究の結果が、三十二歳から六十一歳までの御活動となつて現れた。それであるから日蓮上人はいつでもその事を言つて居られる、自分のこの信仰の土臺が間違つて居るといふことであるならば、いつでも止めてしまふ、誰か自分より勝れた人が出て来て、お前の考は間違つて居るといふことを明に示して呉れたらいつでも自分は止める。開目鈔といふ書物の中にその事を書かれて

智者に我が義破られば用ひじとなり

智慧のある人が出て来て、お前は間違つて居ると言つたら止めるけれども、自分を島流しにするの、首を斬るのといふ位のことではこの考は止めないぞと言はれたのは、たゞ日蓮上人が勇氣があるといふことではない、二十年間、命に懸けての研究の結果この確信が出て來た、これは非常に大事なことですあります。今の我國を見るとそこが缺けて居る、何でも派手に立派なことをやりたがつて、土臺としての命懸けの研究を誰もやらぬ、どの方面でも非常にこれが乏しい。どうしたら流行るだらう……流行ることばかり考へて居る。自分の土臺を作ることをしないで置いて、世間に流行ることばかり考へて居るのでは本當のことが出来る譯がない。斯ういふ點に於て現代の私共は先づ以て日蓮上人の命懸けの研究といふことをお手本としなければならぬと思ひます。

第二には、日蓮上人の活動の時代です。この活動の時代は事新しく申上げるまでもなく、どなたも御存じであります、この活動時代に入られた時の日蓮上人の決心、それを考へなければいけない。法華

經を讀んで見ると、法華經は末法の世に必ず弘まるといふことが書いてある。ところが、日蓮上人三十二歳までの研究の結果その當時の世の中を御覧になると、如何にも世の中は末法の世、自法隱沒とあつて、正しい教が世の中に隠れるとあるがその通りである。開諱堅固であるとあつて、みな自分が我利我慾に募つて争ひをやつて居るが、その通りである。今眼の前の世の中は末法の世の相を正しく現はして居るから、この際にこそ法華經が弘まらなければならぬ。ところが世の中を見渡すと、法華經を弘める人は一人も居ない、さうすればお經の言葉は嘘になつてしまふ。末法の世に弘まるぞと佛様は仰しやつたのに、末法の世になつて法華經を弘める人が居なければ、佛様が嘘つきになつてしまふ。佛様が嘘をつくやうなら佛教といふものを信する價値は無い、そこで問題が起つて来る。一體佛様は嘘をついたのか、つかないのか、この問題はどうしても起つて來なければならぬ。これには日蓮上人は随分頭を悩まれたらしい。そこで結局は、佛様が嘘をついたか、つかないか、そんな無責任なことを考へるべきものではない、佛様を嘘つきにするかしないかは自分の決心で決まる、今世の中で法華經が一番勝れて居ることを知つて居るのは自分だけだ、自分が茲で命懸けてこの教を弘めて、これが弘まれば佛様の豫言が実際に現はれる。茲で自分がグヅ／＼して骨折らないで法華經が弘まなければ佛様が嘘つきになつてしまふ、だから佛を嘘つきにするかしないかは、たゞ自分一人の覺悟一つだといふことに考を決められた、それが先刻小笠原さんも仰しやつた通り不惜身命であります。命に懸けるといふことは、法華經の

『勧持品』の中に

我れ身命を愛せず但だ無上道を惜む

とある。自分は身命が惜しくないといふのは、無上道、佛の眞實の教が世の中に弘まらないのが殘念だから、この教を弘める爲には身命を捨てよう、斯ういふことである。この覺悟を決められた。自分が身に引受けよう、法華經を以て國を救はうと思ふのは自分だけであるから、その爲に自分が茲で懈けて居つて、誰か出て來さうなものだと言つても仕様がない話である、この覺悟を決められて、これを以てズワと一生を貫いて居られるのであります。私はこの事が大事だと思ふ。今でもどうも、誰か出て來さうなものだといふことを皆言つて居る。どうも政治界も行詰りだから大政治家が出て來さうなものだ……宗教界も行詰りだ、誰か偉大な思想家が出さうなものだ……誰か／＼と言つても誰も出て來ない。自分がボンヤリして居てはどうも無責任でいけない。

これから暑くなつて銀座通が賑ふ。人込みが出て居る中を押し分け／＼歩いて家に歸つて愚痴を言つて居る、銀座へ行つたら大變な人込みでどうも押されて困つちやつた……。私はさういふ人に言ふ、押されて困るなら出なければいい、みな出て人込みを抜へてそれで押されて困つたと言ふ、自分が押したんぢやないか（笑）……。世の中はそれである。今の日本は飛んでもない日本だと言ふ、飛んでもない日本を抜へて居るからいけない。いけないと言ふ人は銘々が善い道を探らなければならぬ。間違つて居

ると思ふ人は正しい道を探つて、先づ身を以て先んじて然る後に人を救はうといふだけの覺悟がなくて、たゞ人の缺點ばかり探して居たつてどうして國が救へるものではない。日蓮上人は一たび決心した以上は先づ身を以て奮起された、この御態度は今の日本國民全體の手本でなければならぬと思はれる。（拍手）ところが、第三の時期、即ち佐渡から歸りになつた後はどうであるかといふと、靜に身延の山に引込まれた。これは何故かといふと、それはいろ／＼の理由がありませうけれども、主なことは後を繼ぐ者を作る爲めであります。人間の生命に限りがある。日蓮上人は隨分苦しい目に遭はれたから、佐渡から歸りになつた時は身體も衰へて居らつしやる。自分の亡き後はどうだといふことを考へると、それにはどうしても人間を作らなくちゃいけぬ。随分お弟子も檀那もあつたけれども、日蓮上人の御活動の旺んな時には泌み／＼と教を伺ふ違もなかつた。これではいけない、だからこの際は一つ靜な所に居つて、直接には弟子を教へ、間接には檀那を教へ、さうして自分亡き後に於てもこの法華經の信仰を持ち傳へる者を作りたいといふを考へ鎌倉を去つて身延に入られ、身延で八年間を過された。この間に日蓮上人の教育を受けた者がこの教の後を繼ぎまして、今日にまでこの教が遺つて居るのです。この事も吾々考へなければならぬ。自分の後のことを考へないで、自分の一生ばかり考へてはいけない。

斯ういふやうに日蓮上人の一生を假に三つに分けて、初めに研究時代、第二の時期の活動時代、第三の教育時代、後繼を養ふ時代、これはみな吾々のお手本でありまして、さうしてそれは宗教のことばか

りではない。店を一軒聞くのだつて、先づ此處にどういふ店を開けたらいかといふ研究がなければいけない、一たび店を開けたら命懸けてこれを保たなければいけない、景氣が悪いからモウ廢めてしまはうといふやうなことでは店は持たない、店の景氣が好くなつたら今度は後繼を作らなければならぬ、人間を作らなければならぬ。大きい事、小さい事、みなこの三つの所を通らなければ完全なものではないでせう。だから宗教上に於て、日蓮宗であらうと真宗であらうと、禪宗であらうと何宗であらうと、日蓮上人の人として示されたこのお手本をお手本としようといふ點に於ては誰も一致して呉れなければならぬと思ふ。斯う考へて本多上人の御一生を思ふ時に、本多上人が研究に熱心で居らしたことは申すまでもない。これは先刻來からいろ／＼な方がお話になつた。お逝くなりになる時までいろ／＼研究をやつて居られた。又法華經を弘める爲に命を打込んでお働きになつたことも皆さん知つて居ると思ひます。又自分の志を繼ぐ者を作りたいと思つて、如何なる者にでも懇切な教訓を吝まなかつた。吾々のやうな者でも、お會ひ申す度に何か教へて下さる。私などは無論どうも弟子甲斐もない弟子で、碌なことも習はなかつたのですが、それでも見捨てないで、始終お會ひ申す度にいろ／＼な事を教へて下さる、寔に有難い。實に本多上人の研究に熱心で居らしたこと、身命を惜まずして教を弘められたこと、懇切に後進を教へ導いて後繼を作られたこと、この三つの點から考へると、日蓮上人の御一生と正しく一致して居ると私は思ふ。この事は何宗の人でも何派の人でも直接には本多上人に學ばなければならぬ、もつとぬと思ふのであります。

遠く遡れば日蓮上人に學ばなければならぬ。要するに、今の世の中が間違つて居るといふのは、研究の熱心が足りないから、又命懸けといふ心持が足りないから、又將來のことを考へる考もないからであつて、この三つとも駄目です、それで國がよくなるものではありはしませぬ。私はこの場合に於て本多上人を懷ふと共に、更に本多上人を通して日蓮上人を懷ひ、國民たるところの吾々、又聊かなりとも佛教に興味を持ち、緣故を持ち、信仰を持つて居る吾々は、この三つの點に於て大に學ぶ所がなければならぬと思ふのであります。



菅 公 代 辯

五四

す が は ら

『どうぞ浦場の諸君は

心だに誠の道に叶ひなば

祈らずとも神や守らむ

といふ菅公の歌が、日本人の信念であると思ふ私に共鳴して下さい……私は悪い事をせず、明淨正直さへ守つて居れば、祈らなくても神は日の照すが如く守つて下さると云ふ信念を持つて居ります。私の講演は之を以て終ります』

右は最近ある知名の教育家が『我が國民の信念に就て』といふ題下に縷々數千萬言を費された講演の結論である。皆さんは果して其鳴されますか。自分(菅公)はこれを耳にして何と亂暴な、情けない、教育家として隨分獨斷的な憶測を逞ふした所論だと甚だ有難迷惑なんである。自分は儒者だから宗教の信仰などはあるまいと思つてゐる人が多いけれど、我家は累代佛教信者なんである、決して無道念の道學者ではない。即ち祖父の清公は嵯峨、淳和、仁明の三朝に歴事した儒者であるが、同時に佛教徒であり

特に晩年は造像寫經を以て法樂とした。又慈父の是善も矢張り大學頭、文學博士であつたが、最も篤く佛教を信じ、殊に法華經十卷を書寫して、我母の冥福を祈つたくらゐである。悲母はその臨終に際して自分を招き『汝は年尚ほ幼であり且つ多病であるから、私は心懸りである、どうかよく信心をするやうに、而して觀音の像を造つて一心に祈願するやうにせよ』と仰せられたことを深く心に刻み、自分は佛弟子として父母の追福菩提の爲め、南無觀世音菩薩、南無妙法蓮華經と、日蓮上人の唱題よりも早く唱へて居た。それに三十八歳の頃、愛子阿滿を失つた時などは一層佛門に入つてしまふかとさへ考へた。後年大宰府に貶せられた蟄居生活に於ては、彌々心身を傾けて妙法蓮華經を讀誦し、書寫の修行を勵んだ。かかる貴い信仰のお陰で我が人格は益々向上し、世間に種々誹謗の聲が盛んであつても、いくら迫害が加はつて來ても、少しも悲觀することなく、世を呪阻することもなく、泰然として聖恩の有難さに感謝の涙を濺いで歎びの日常を送り得たのである。

人は正しい宗教の信心なくして、祈らずとも神や守らむとか、私は悪い事をせないとかいふても、その善惡は何を標準にして定めるのか、そこに道德上からも、學問上からも、宗教上からも徹底した教法の尺度に據つて、之に隨ふは善であり背くは惡であるとするならば、無道念、一闇提の徒は自身に惡事は働くぬと思つても既に教法を無視せる大罪を釀して居ることになる。偉大なる覺者に對して、信伏隨順するといふ柔軟な氣持なく、疑慢の念に社會は破壊されんとして居る。人心を根本的に訓育するに

は、どうしても宗教の力を仰がねば達成されないといふ點に、教育者も爲政者も等々すべてが自覺せねば、人類の幸福は來ないと聖人は仰せられて居る。從つて斯様な歌を以て、我國民の信念とするやうなことは非常な間違であり、獨善的、危險思想で、前途を誤り易いものであるから、自分は黙するに忍びず、人を假りて一言申述する次第である。請よ、學者、幸に用心して検討せよ。

記事

本部團報

釋尊花祭 朝日輝くルンビニの、無憂樹の花はあざやかに、百鳥囀る春八日、聖の御子は生れたまふ：實に四月は人生の最大の福音聖月である。

四日の第一曜日午前十時、お花祭を本部講堂に開催した、生憎の春雨が絹絲のやうに降つてゐる。子供達の折角樂しみにして居た立派に飾りつけられた花御堂も、甘茶もどうなるかと思はれたが、それは寧ろ自分達の杞憂に過ぎなかつた。九時半頃から

一群又一群と續いて忽ち滿員となる。
定刻穢部理事の「始めの言葉」から、君が代を合唱し、和賀師の主唱で簡単な「あ祈」を御佛に捧げ、花祭及び宗歌が奏せられ、續いて矢野研究生の可愛い舞蹈教番、童話等が、矢野女史一統及び和賀師などで演じ、山口師の「終りの挨拶」と聖上萬歳に、二百あまりの子供達は「心の花を開きませう」「佛の花を仰ぎませう」の短冊とお菓子袋を両手にして大喜で歸つた。此等の二葉の若い芽が、どうかしてスク／＼と正しい生育を致す様に望んで止まぬ。

釋尊御降誕會 同日午後一時半より大人を中心にして、非現生會の法要が營まれ、穢部理事の「御降誕の意義」中村清一講師の「求法の態度」小林一郎先生

會計狀態

收支勘定明細表

自昭和十一年四月一日
至十二年三月廿一日

(一) 収入之部

一金六〇九九七四銭

内
譯

一金六〇九九七四銭

總
收

入

寄附金及維持費

團體並誌料

書籍レコード販賣代

講座總講料

法要喜納

上田理事長補助

基本会利息

雜收入

前年度越高

(二) 支出之部

一金五、四一八四九銭

總
支

出

の「佛の國土」及び小西日喜師の「釋尊の教化」等の講演があり、來會者一同へ法雨充潤して五時閉會の幕は垂された。

御造文講座 小林先生の開目抄續講は、目下下巻が講義されて居る。

日曜日講集 每日曜午後二時より勸行と法話會が開かれ、求道の士女に正しい宗教の信仰が培はれて居る。

團員總會 四月廿五日午後一時半より本部に於て、本團々員總會を開催し、昭和十一年度事業並に會計報告を致し、續いて本年度の事業計劃及び豫算を協議して後、懇談茶話會に移り、各位の胸襟を開いたいかにも宗教的の清集であつた。殊に福島支部から夏谷氏が遙々御來會下さり、横濱からは貝塚氏が代表された事を感謝する。

事業報告は其都度本誌上に發表したから、左に昭和十一年度の會計狀態を掲げて、缺席の各位に御覧を仰ぐ。

一金五、四一八四九銭
内
譯

金一、六一四七七銭

金一、二〇六、七〇

雜誌印刷費本代
布教用語印刷費

故本多日生上人の嗣子禮三の君こたひ東洋大學を
卒業して出家したまひし由を聞きて

大八木義雄

すみそめの ころもにかへて 父の師の
足跡をふむ 君そられしき
數おほき 父の友をは 手ひきにて
君か行きます みちそかかやく
たくひなき 父を學ひて 末の世に
あたらしき 君かころもに 染めて着よ
高くも鳴らせ のりのつつみを
そのかそいろの 深き心を
撓みなく 刈りそけて行け いつの世も
道妨くる うはらからたち

其の法施には、五の勝利有るに由る。云何んが五と爲す。一には、法施は自他を利するこ
とを兼ね、財施は爾らず。二には、法施は能く衆生をして三界を出でしむ、財施の福は欲
界を出でず。三には、法施は能く法身を淨む、財施は但だ唯だ色を增長す。四には、法施
は窮り無し、財施は盡くること有り。五には、法施は能く無明を斷ず、財施は唯だ貪愛を
伏す。

法身は常住なるも常見に墮せず。復た斷滅すと雖も亦断見に非ず。能く衆生種種の異見を
破し、能く衆生種種の眞見を生ず。能く一切衆生の縛を解く。

諸經の中に於て一句一頃、人の爲めに解説するも、功德善根は尙ほ限量無し。何に況んや、
如來 大法輪を轉じ、久しく世に住して般涅槃する莫からんことを勸請するをや。

佛の言はく、若し此の妙經典を講讀すること有らば、流通の處、其の國中に於て大臣輔相
四種の益有り。云何んが四と爲す。一には、更に相親穆尊重
愛念せん。二には、常に人王の爲に心に愛重せられ、亦た沙
門・婆羅門・大國・小國の邊敬する所と爲らん。三には、財を輕
んじ法を重んじ世利を求めず、嘉名普暨して衆に欽仰せられ

【三界】 欲界とて、天上界の六
欲天以下六道全部、色界とて
欲を離れし天上界の一部、無
色界とて物質なき世界

ん。四には、壽命延長し安隱快樂ならん。是を四種の利益と名づく。

金光明最勝王經卷第四

最淨地陀羅尼品第六

善男子よ、譬へば寶須彌山王の一切を饒益するが如く、此の菩提心は衆生を利するが故に、是を第一布施波羅蜜の因と名づく。善男子よ、譬へば大地の衆物を持すが如きが故に、是を第二持戒波羅蜜の因と名づく。譬へば師子の大威力有り、獨歩して無畏なるが如く、驚恐を離るるが故に、是を第三忍辱波羅蜜の因と名づく。譬へば風輪那羅延之力、勇壯速疾なるが如く、心に退せざるが故に、是を第四勤策波羅蜜の因と名づく。譬へば七寶樓觀に四階の道有りて、清涼の風來り、四門より吹きて安隱の樂(精進)を受くるが如く、靜慮の法藏求めて満足するが故に、是を第五靜慮波羅蜜の因と名づく。譬へば日輪の光耀熾盛なるが如く、此の心速に能く生死無明の闇(闇滅)を破滅するが故に、是を第六智慧波羅蜜の因と名づく。譬へば商主の能く一切の心願をして満足せしむるが如く、此の心能く生死の險道を度り、功

徳の實を獲るが故に、是を第七方便勝智波羅蜜の因と名づく。譬へば淨月圓滿にして翳ムカシなきが如く、此の心能く一切の境界に於て清淨を具足するが故に、是を第八願波羅蜜の因と名づく。譬へば轉輪聖王の主兵の貴臣は意に隨つて自在なるが如く、此の心善能く莊嚴して佛國土を淨め無量の功德ありて廣く群生を利す、故に是を第九力波羅蜜の因と名づく。譬へば虛空及び轉輪聖王の如く、此の心能く一切の境界に於て障礙有ること無く、一切處に於て皆自在を得て灌頂位に至る、故に是を第十智波羅蜜の因と名づく。善男子よ、是を菩薩摩訶薩の十種の菩提心の因と名づく。是の如き十因を汝當に修學すべし。

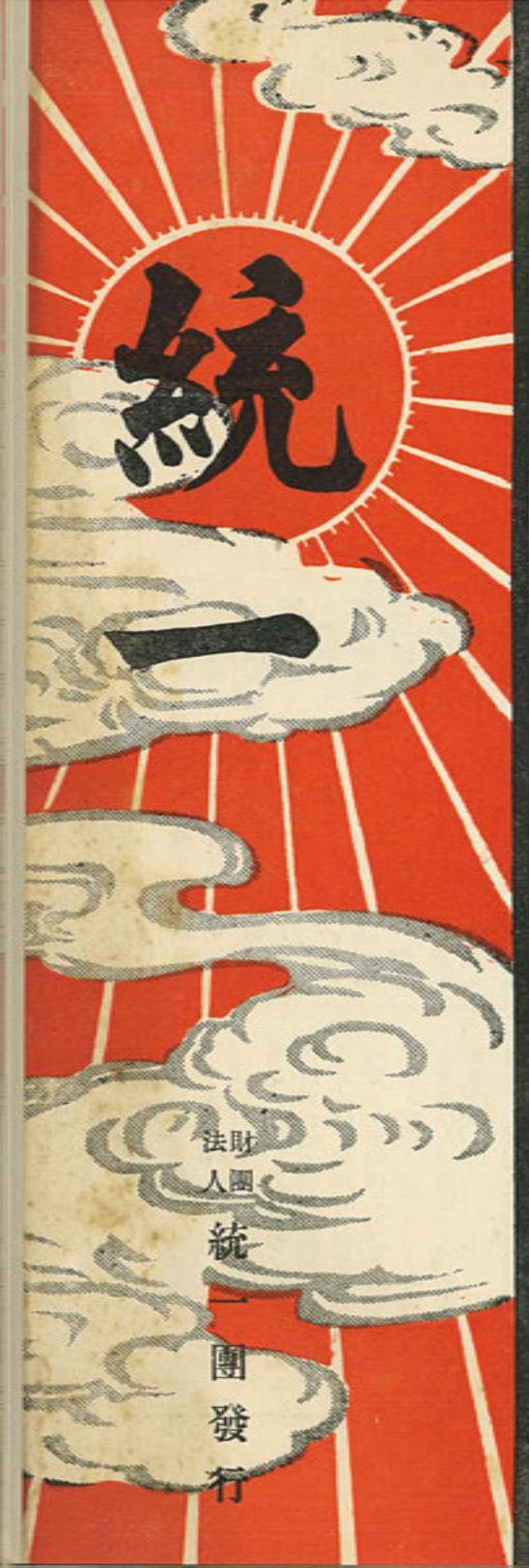
善男子よ、五種法に依りて菩薩摩訶薩は布施波羅蜜を成就す。云何んが五と爲す。一には信根、二には慈悲、三には求欲の心無し。四には一切衆生を攝受し、五には一切智智を願求す。善男子よ、是を菩薩摩訶薩は持戒波羅蜜を成就すと名づく。善男子よ、復た五法に依りて菩薩摩訶薩は忍辱波羅蜜を成就す。云何んか五と爲す。一には三業清淨。二には一切衆生の爲めに煩惱の因縁を作さず。三には諸の惡道を閉ぢて善趣の門を開く。四には聲聞獨覺の地を過ぐ。五には一切の功德皆悉く満足す。善男子よ、是を菩薩摩訶薩は持戒波羅蜜を成就すと名づく。善男子よ、復た五法に依りて菩薩摩訶薩は忍辱波羅蜜を成就す。

云何んが五と爲す。一には能く貪、瞋、煩惱を伏す。二には身命を惜まず安樂止息の想を求めず。三には往業を思惟し、苦に遭ふも能く忍ぶ。四には慈悲心を發して衆生の諸善根を成就するが故に。五には甚深無生法忍を得と爲す。善男子よ、是を菩薩摩訶薩は忍辱波羅蜜を成就すと名づく。善男子よ、復た五法に依りて菩薩摩訶薩は勤策波羅蜜を成就す。云何んが五と爲す。一には諸の煩惱と與に共に住するを樂はず。二には福德未だ具せざれば安樂を受けず。三には諸の難行苦行の事に於て厭心を生ぜず。四には大慈悲を以て一切衆生を攝受し利益し方便して成熟す。五には不退轉地を願求す。善男子よ、是を菩薩摩訶薩は勤策波羅蜜を成就すと名づく。善男子よ、復た五法に依りて菩薩摩訶薩は靜慮波羅蜜を成就す。云何んが五と爲す。一には諸の善法に於て攝して散せざらしむるが故に。二には常に解脱を願ひ二邊に著せざるが故に。三には神通を得て衆生の諸の善根を成就するを願ふが故に。四には淨法界の爲めに心垢を蠲除するが故に。五には衆生の煩惱の根本を斷するが故に。善男子よ、是を菩薩摩訶薩は靜慮波羅蜜を成就す。云何んが五と爲す。一には常に一切の諸佛菩薩に依り菩薩摩訶薩は智慧波羅蜜を成就す。云何んが五と爲す。一には常に一切の諸佛菩薩及び明智の者に於て供養し親近して厭背を生ぜず。二には諸佛如來は甚深の法を説くに心

本多日生上人著書特價提供			
聖語錄	改版	送料共價	金壹圓八拾錢
法華經要義	天覽	送料共價	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓	全	送料共價	金壹圓五拾錢
真理の基礎に據つ佛教の信仰	全	送料共價	金貳圓九拾錢
法華經要品	全	送料共價	金貳圓九拾錢
日生上人レコード(西面)	全	送料共價	金貳圓九拾錢
日蓮聖人	全	送料共價	金貳圓廿五拾錢
本尊意識に就て	全	送料共價	金貳圓廿五拾錢
法華尊の八相成道	全	送料共價	金貳圓五拾錢
法華經の心髓	全	送料共價	金壹圓七拾錢
河合謙明著	全	送料共價	金拾錢
本多日生上人	全	送料共價	金壹圓七拾錢
勸行作法	全	送料共價	金拾錢
河合謙明著	全	送料共價	金拾錢
皇道と日蓮主義	全	送料共價	金拾錢
	金壹圓	金壹圓	金壹圓
送定價	送定價	送定價	送定價
一冊	一冊	一冊	一冊
送一ヶ年前 料金	送一ヶ年前 料金	送一ヶ年前 料金	送一ヶ年前 料金
金五拾 厘錢	金五拾 厘錢	金五拾 厘錢	金五拾 厘錢

七十ノ六町羽音區川石小市京東
部出版團一統
香〇二四九京東替振
財人團

注		價定一統	
▲御申込へ總て前金ノ事	一冊 宇ヶ年	金貳拾錢	送料壹錢
▲御申込へ總て前金ノ事	一ヶ年	金壹圓貳拾錢	送料共
通知ノ事			
昭和十二年四月廿七日 昭和十二年五月一日 印刷納本 發行	(第五百六號)		
東京市小石川區音羽町六ノ十七 發行人穢 東京市四谷區内藤町一 印刷人山田英二 東京市小石川區音羽町八ノ十一 印刷所野島好文堂印刷所 電話牛込六九六六番	東京市小石川區音羽町六ノ十七 發行人穢 東京市四谷區内藤町一 印刷人山田英二 東京市小石川區音羽町八ノ十一 印刷所野島好文堂印刷所 電話牛込六九六六番		



次 目

阿含の人身觀(完結)	本多
偶詠(毒人に寄す)	大八木
佛教文學に現れたる人間性(下篇)	日義雄生
開目鈔講話(第八講)	本田義
大なる悦と歎(上篇)	小林一郎
事記	じん
○本部開報	○地方教信
○開費甚科領收及寄附金領收	○編輯室より
大藏經要義續篇(其四)	本多日生